

- nispa utar katkema utar
irankarapte. 皆さん
こんにちは。
- ku=rehe anakune 船島美湖 ku=ne ruwe ne. 私は船島美湖と申します。
- hene, sisam itak ku=rehe 美湖, aynu itak ta
“pirka to” 美しい湖と書くこの名前は、愛する故郷である
千歳市のオコタンペ湖のように
ku=kotan tapkasi okotanpe to sinne hetuku 美しく澄んだ子に育ててほしいという願いがこ
められています。
e=yay=tupa.
- teeta, wan=earwanhonne pa etok ku=sin rit,an 私の先祖は130年前、現在の千歳市長都に入植。
chitose-osatsu kotan. ちょうど5代目に当たる私も、千歳で生まれ育
ち、この地を愛しながら生活しています。
uruokata ku=ani ka an chitose-osatsu kotan.
- ku=i-e-tunnankar aynu, sinep saranip ruwe そんな私とアイヌ文化との出会いは1つのポー
チがキッカケでした。
ne.
- ekap saknoski, ku=michi turano ciw-pet kotan 小学生の夏の日、私は父とキャンプで旭川へ向
kai oman wa かいました。
orowano ku=hapo ye “yukar-ori”saranip その際、母から「お土産としてユーカラ織のポー
imoka encore yan. チを買ってきてほしい」と頼まれました。
- ciw-pet kotan sirepa, sinep parka saranip さっそくお土産屋さんにつくと、一つの素敵な
ku=nukar na. 柄の入ったポーチが目に入りました。
- ku=ye “tanpe yukar-ori” an ya? 私は父に「これかな？」と尋ねると「それは少
ku=michi ye “somo tanpe aynu saranip ne” し違うな。これはアイヌ刺繍のポーチだね。」と
教えてくれました。
- hine, ku=michi ye “aynu utar anak Hokkaido 父は続けて、日本にはアイヌと呼ばれる人たちが
un ciotuwasi kor 民族 ruwe ne” a i がいること。
epakasinu.
- orowano, kes-pa an kor ku=michi ye aynu そして、アイヌの人々は文化や誇りを大切にし
eucaskuma ne ciki aynu kotan hem ながら今も生きていることを優しく教えてくれ
a i epakasinu. ました。
それ以来、父は毎年の旅行を通じて、
北海道の地名の中にはアイヌ語が由来となっ
ているものが多いこと、

	コタンと呼ばれるアイヌ民族の街があることについても教えてくれました。
yeyerampokiwen, ku=michi isam. yakka taan ruwe ne, ku teta an.	残念ながら父は既に亡くなりましたが、このきっかけがなければ、私がこうしてこの場にいることはなかったと思います。
kanna-suy, ku-paha hotnepa neyke somo oyra.	また、もう一つ、私が20歳を迎えた誕生日での忘れられない出来事もあります。
ramkorekte tonkor kisarkirorantap ku=sisam aca.	成人を祝う誕生日会で、和人トンコリ作家の叔父が、祝いの場で披露されるアイヌ音楽を演奏してくれました。
katun ram kotuntek parka hawe.	まるで大きなコンサートホールで聴いているかのような心に深く響く力強い音色は、時が経つのを忘れ、聞き入ったことを今でも覚えています。
ari=pak no ku=ye ku kewtum tuyma aynu, yaysitoma.	さて、ここまで私とアイヌ文化についてお話ししましたが、 恥ずかしながら私は近年まで、アイヌ文化はどこか遠くにあるものと感じていました。
ku kotan okay poronno pewre sisam an hikusu kusu, kotan esabetuki somo paste,	というのも、私が住んでいた地域は、千歳市でも比較的転勤してきた若い家族が多く住んでいる地域のため、そもそも北海道にルーツを持つ人がおらず、市内に今も残る差別の存在すら、気づくことができませんでした。
ku yaykopeker “aynu ku=nukan yakka,akan shirawoi hakubutukan patek ku=nukar eaycap”	だからこそ私は「アイヌ文化は教科書や博物館で触れるものであり、阿寒や白老へ行かないと、今も文化を受け継ぐアイヌ民族の人々に会うことはできない」と思いこんでしまっていたのです。
yakka, ku=hapo kari ikarkar ipakasnu-tempu, ku ehewpa ku=oeraman.	しかしそんな生活のなかでも、アイヌの人々の営みがすぐ近くにあることに気づいたキッカケは、刺繍好きの母が通いはじめたアイヌ刺繍の教室でした。

ku=hapo kiroroan “ray koraci parka ipakasnu-
tempu opa!”
orowa, ranma kane ranma kane ikarkar kor
e=an.
ku ehewpa ku=kor usaampe kosiramante.

sirki taknum e ka sisserkeesinnay e ka,
tusuy ka resuy ka kuki wa tanepo kueaskay,
ku=hapo a i usa yepakasnu.

orowa, aynu tura iemawne, poronno itak parka
ruwe un.
ray koraci, sonno aynupuri eramanno.

orowa, ku=hapo yepakasnu “itak an ro”.

ku eramasuy koitakmuye.

ponno hawe somo poronno asurkor.
ney ta ku=an, ku=ye ku=itak,
ku=caranke,ku=yepakasnu.

tampe uepeker yukar neno okay es=ne.
esna irenka somo pirka,

「やっといい教室が見つかったの！」と喜ぶ母と、
その日を境に、夜な夜なチクチクと進む針仕事。
その過程を見ながら、刺繍はからっきし苦手な私も、また違う視点から興味が湧いてきました。

模様の意味や、地域で異なる刺し方。
一つの作品が出来上がるごとに、だんだんと母を通じて教わるが増えていきます。

そして、特別に参加させていただいた交流会で、講師の方々が実際に受けた差別の経験談を生きた言葉として伺うことができたことで、ようやく、受け継がれるアイヌ文化と、今を生きるアイヌの人々を身近に感じ、それまで見て学んできたものをよりリアルに想像することができたのです。

そんな折、母からこのイタカンローを教えてもらいました。

実は私、高校生の頃から弁論部に入るほど、言葉で想いを伝えることが好きなんです。

弁論は声ひとつで、自分の想いを多くの人に伝えることができます。
どんな場所においても、自分の意見を自分の言葉で発表することが即ち弁論になる、そう私は教わりました。

これは、文字に頼ることなく、リズムや音、声に込めた想いによって歴史を伝える
ウエベケレやカムイユカラに似ていると私は思います。

「人間は考える葦である」と言いますが、その考えを内に秘めているだけでは、未来になにも残すことができません。

hawe kiroro itak kiroro,sipase.

音の力、声の力は偉大です。

ku hawe ruyka no sietok.

自分の身体一つ、声を発するだけで、受け継いできた伝統や想いを、また次の世代へ渡すことができるのです。

ta ne te pakno ku=nukar aynupuri,
tan "itak an ro" ta ku oeipok aynupuri

このイタカンローは、今までアイヌ文化を遠くから「見る」ことしかできなかった不器用な私でも参加できる貴重な場所です。

ku siknu ikkewe, asurani na.
ta ne te pakno ku=itak ta poronno kewtum
asurani na.

私の人生のテーマは「伝えること」
いままで私は、様々な経験を通じて感じたことを弁論という形で伝えてきました。

ku=yakukor, tane wano aynu itak ari aynupri
kanpi ku=nuye kor kuan.
ku=michi ta ku=hapo ari u-pak-no-u-ne-no,
ku=hawe ku=itak eisokor,
ku=hekaci en aynu itak ari aynupri asurani na.

そんな私の使命として、これからもアイヌ語や文化の勉強を続け、
私の父や母と同じように、声の力を信じ、まずは自分の子供たちの世代へアイヌ語や文化を伝えていきます。

orowa kanna neyta ka, ta poronno kewtum
asurani na.

そしてまた、いつかこの場で、勉強を通じて感じた想いを、皆さんに伝える日がくることを楽しみにしています。

iyayraykere.

ありがとうございました。